

中学校英語教科書に見る小中連携

川上 典子

キーワード：小中連携、学習指導要領、検定教科書

1. はじめに

平成 29 (2017) 年告知の新学習指導要領では、時代の変化に応じた新しい教育観が打ち出され、目指す資質・能力として「知識・技能」の習得、「思考力・判断力・表現力等」の育成、「学びに向かう力・人間性等」の涵養の 3 つの柱が明確になった。また、その学び方についても「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。さらには児童生徒に一人一台の PC を持たせる GIGA スクール構想に基づく ICT 活用も進められている。^{注1}

このような教育の変革に加え、英語教育においては、小学校では中学年の外国語活動の必修化、高学年の外国語の教科化が始まっている。中学校では時数の変更はないものの授業は英語で行うことを基本とすると明記された。到達目標に「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)」(ヨーロッパ評議会、2001) の指標が取り入れられ、小学校から高校までの到達目標が明確になった。これまでは高校で A2 の半ばまでが到達点だったが、小学校での学びを受けて、中学校での目標値は A1-A2、高校で B1 と大きく伸びている。これは小学校の外国語の時数が増えたというだけでなく、目標、指導方法、評価を含む日本の小中高の英語教育を大きく変える大改革だと言える。そしてこれは前回の学習指導要領改訂から言えることだが小中高の目標が同じ方向に向かって積み木を積み上げるように伸びている。つまり、それぞれの段階の目標値を達成することが次の段階を順調に進めることになるので、小中高それぞれの目標値に沿った指導を行うことが重要である。そして、それぞれが小中と中高の接続時に段差が少ないようにならなければならないスロープで繋ぐ努力が必要だと思われる。

この小中高連携は英語教育改革の成功への鍵となるが、その中でも中学校は、

入口と出口において繋ぐことが求められるので、その指導は大変重要になる。本論文では小中連携に絞り、特に中学校の教科書に注目して小学校の学びを踏まえた中学校での指導に繋ぐための教科書編成についてみていきたい。令和3(2021)年度に新学習指導要領に基づく中学校検定教科書が出された。学習指導要領を反映して中学校英語の教科書にどのように小学校の学びを繋ごうとしているのか、まずは小中の学習指導要領の中での繋ぎ方を見た上で、中学校英語教科書の繋ぎの工夫に注目する。特に、1年生教科書において単元に入る前の橋渡し部分と、1学期の単元構成と小学校で学んだ表現の文法事項の扱いに焦点を当てたい。

2. 新学習指導要領における小中連携

これまでも小中連携の必要性は指摘されてきているが、小学校で中学年週1回の外国語活動に加え、高学年週2回の外国語科が導入されたことで小学生は卒業時までこれまでに140時間増え、210時間の学習をすることになる。それを踏まえ、そしてそれを活かすように中学校では小学校における学習との接続に一層留意する必要がある。中学校学習指導要領の外国語科の目標である「コミュニケーションを図る資質・能力」の育成は、小学校の外国語科において「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」の育成を目標としていること踏まえて設定された。総則には「小学校教育までの学習の成果が中学校教育に円滑に接続され、義務教育段階の終わりまでに育成することを目指す資質・能力を生徒が確実に身につけることができるよう工夫すること」(p23)と明記されている。

小学校では時数が増えただけでなく、学ぶ技能も聞くこと・話すことの2技能から読むこと・書くことの2技能が加わり4技能になった。聞くこと・話すことは外国語活動から入っているが、読むこと・書くことは外国語科から入っていて、それぞれの到達点に差があることを留意しておく必要がある。話すことはやり取りと発表の2つに分けられ、合わせて5領域をそれぞれ中学校の学習に繋げていく必要がある。

まずは小学校と中学校の学習指導要領の各技能・領域の目標を対比し、次に小学校と中学校での文法事項の扱いについて学習指導要領にどのように書かれているか精査する。

2.1 小学校と中学校の学習指導要領の各技能・領域の目標

小学校と中学校の学習指導要領の各技能・領域の目標を以下の表1にまとめた。その中で、学校間で明らかに違う部分について下線を引いた。

表1 小学校と中学校の学習指導要領の各技能・領域の目標

	小学校 外国語科の目標	中学校 英語科の目標
聞くこと	<p>ア <u>ゆっくりはっきりと</u>話されれば、自分のことや身近で<u>簡単な事柄</u>について、<u>簡単な語句や基本的な表現</u>を聞き取ることができるようにする。</p> <p>イ <u>ゆっくりはっきりと</u>話されれば、日常生活に関する<u>身近で簡単な事柄</u>について、<u>具体的な情報</u>を聞き取ることができるようにする。</p> <p>ウ <u>ゆっくりはっきりと</u>話されれば、日常生活に関する<u>身近で簡単な事柄</u>について、<u>短い話の概要</u>を捉えることができるようにする。</p>	<p>ア <u>はっきりと</u>話されれば、日常的な話題について、<u>必要な情報</u>を聞き取ることができるようにする。</p> <p>イ <u>はっきりと</u>話されれば、日常的な話題について、話の概要を捉えることができるようにする。</p> <p>ウ <u>はっきりと</u>話されれば、<u>社会的な話題</u>について、<u>短い説明の要点を捉える</u>ことができるようにする。</p>
話すこと [やり取り]	<p>ア <u>基本的な表現</u>を用いて<u>指示、依頼</u>をしたり、それらに<u>応じたり</u>することができるようにする。</p> <p>イ 日常生活に関する<u>身近で簡単な事柄</u>について、自分の考えや気持ちなどを、<u>簡単な語句や基本的な表現</u>を用いて伝え合うことができるようにする。</p> <p>ウ <u>自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄</u>について、<u>簡単な語句や基本的な表現</u>を用いて<u>その場で質問</u>をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする。</p>	<p>ア <u>関心のある事柄</u>について、<u>簡単な語句や文</u>を用いて<u>即興で伝え合う</u>ことができるようにする。</p> <p>イ 日常的な話題について、<u>事実や自分の考え、気持ちなどを整理し</u>、<u>簡単な語句や文</u>を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする。</p> <p>ウ <u>社会的な話題</u>に関して<u>聞いたり読んだりしたこと</u>について、<u>考えたことや感じたこと、その理由</u>などを、<u>簡単な語句や文</u>を用いて<u>述べ合う</u>ことができるようにする。</p>

話すこと [発表]	<p>ア <u>日常生活に関する身近で簡単な事柄</u>について、簡単な語句や<u>基本的な表現</u>を用いて話すことができるようにする。</p> <p>イ <u>自分のこと</u>について、伝えようとする内容を整理した上で、簡単な語句や<u>基本的な表現</u>を用いて話すことができるようにする。</p> <p>ウ <u>身近で簡単な事柄</u>について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や<u>基本的な表現</u>を用いて話すことができるようにする。</p>	<p>ア <u>関心のある事柄</u>について、簡単な語句や文を用いて<u>即興</u>で話すことができるようにする。</p> <p>イ <u>日常的な話題</u>について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて<u>まとまりのある内容</u>を話すことができるようにする。</p> <p>ウ <u>社会的な話題</u>に関して聞いたり読んだりしたことについて、<u>考えたことや感じたこと、その理由</u>などを、簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする。</p>
読むこと	<p>ア <u>活字体で書かれた文字</u>を識別し、その読み方を発音することができるようにする。</p> <p>イ <u>音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現</u>の意味が分かるようにする。</p>	<p>ア <u>日常的な話題</u>について、簡単な語句や文で書かれたものから<u>必要な情報を読み取る</u>ことができるようにする。</p> <p>イ <u>日常的な話題</u>について、簡単な語句や文で書かれた<u>短い文章の概要を捉える</u>ことができるようにする。</p> <p>ウ <u>社会的な話題</u>について、簡単な語句や文で書かれた<u>短い文章の要点を捉える</u>ことができるようにする。</p>
書くこと	<p>ア <u>大文字、小文字を活字体</u>で書くことができるようにする。また、<u>語順を意識しながら音声</u>で十分に慣れ親しんだ<u>簡単な語句や基本的な表現</u>を書き写すことができるようにする。</p> <p>イ <u>自分のことや身近で簡単な事柄</u>について、例文を参考に、<u>音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現</u>を用いて書くことができるようにする。</p>	<p>ア <u>関心のある事柄</u>について、簡単な語句や文を用いて<u>正確</u>に書くことができるようにする。</p> <p>イ <u>日常的な話題</u>について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて<u>まとまりのある文章を書く</u>ことができるようにする。</p> <p>ウ <u>社会的な話題</u>に関して聞いたり読んだりしたことについて、<u>考えたことや感じたこと、その理由</u>などを、簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする。</p>

聞くことについては、小学校の外国語科の「ゆっくりははっきりと」話されることが中学校ではレベル差をつけて「はっきり」のみになっている。小学校でゆっくりのスピードに慣れすぎると中学校でのスピードの速さに驚くことになるので、小学校から自然なスピードに慣れるよう少しずつ近づけ、中学校では最初は少しスピードを緩めてスタートするのが段差の解消になるだろう。聞く話題については、中学校では社会的な話題が入ってくるが、中学校の最初からそうした話題を英語で取り入れるのではなく、日頃から生徒の興味・関心を高め日本語での知識を広げておくことも、聞くことへの難しさを緩和することができるだろう。

話すことについては、まず中学校でのトピックが身近で簡単な事柄から日常的な話題、そして社会的な話題まで広がりがある。聞くこと以上に話すことは内容を話者が知らないと話せないなので、幅広い知識が必要だろう。事前準備として、小学校の授業で身近な話題の延長上に社会的話題があることを意識しておくことができる。例えば、文部科学省から移行期用に5・6年生用の教材として出された『We Can!』の中の“This is My Hero.”という単元で大坂なおみ選手を取り上げているが、彼女の黒いマスク姿の写真を見せてこのマスクになんと書いてあるか注目させることで、Black Lives Matter に多少なりとも触れることができ、社会的話題に注目することになるだろう。中学校でも社会的話題を取り上げるときには中学生が周知の身近な話題から入っていくような工夫をするとよいだろう。また、話すことのやり取りでも発表においても「即興で」という言葉が入っている。小学校から行っているスモールトークや児童同士のコミュニケーション活動を中学校でも継承し、さらに発展させ、話す機会を確保し続けることが即興で話す力をつけるためには重要になるだろう。

読むことと書くことは、5・6年生から入っているので慣れ親しむレベルが目標となり、聞くこと・話すことにおいて定着を目標としているレベルと異なる。小学校での読むことは、文字の識別と「その読み方を発音できる」というのは、アルファベットの文字の名前とは別の単語の中の文字の読み方が読めるということである。さらに「音声で十分に慣れ親しんだ」英語が書かれたもの

の意味が分かる、推測して読めるということなので、初見では簡単な英語であっても読めるわけではない。中学校教師は生徒にとって既習表現であるかどうかを把握し、既習表現を読むことから入って英文を読むことに慣らしていく必要があるだろう。

書くことは、小学校では大文字・小文字を書けることと「音声で十分に慣れ親しんだ」簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができる、そして自分が表現したい語句に置き換えて文が書けるということが目標である。中学校ではそれらを引き継いだ上で、自力で正確に文が書けること、内容を整理してまとまりのある文章が書けること、そして社会的な話題についても自分の考えやその理由が書けることが目標になる。書くことは個人差が出る技能だが、小学校で書くという表現手段が増えたことを児童が肯定的に捉えることができる指導があれば、中学校での英語学習の動機づけにつながることも考えられる。話すことと異なり書いたものは残るので、小学校では書いたものは教師が毎回確認するような丁寧な指導が必要であろう。また、書き写しの段階で英語の語順への気づきがあると中学校での文法理解の大きな助けになるだろう。

このように小学校と中学校の4技能における目標を対比することで、校種間の段差が生じるであろう箇所が見えてくる。小学校では中学校での学習を見通した指導により、また、中学校は小学校での到達点を引き継ぐことで中学校へ上がるときの段差は縮まることになるだろう。さらに、実際の指導を踏まえることも不可欠で、中学校と小学校のお互いの授業を実際に見ることで中学校に入った生徒が感じるギャップをつかむことができる。また、中学校教師は小学校で使用した教材や小学校教師が使った英語表現などを引き継ぎ、中学校仕様に変えていくこともできる。そして、授業の中で生徒から小学校で学んだことを聞き、過去の学びを引き出すことによって、教師には指導の手掛かりになり、生徒の学びも促進されるだろう。

2.2 学習指導要領における文法事項の指導

中学校学習指導要領の「2 内容」の「エ 文、文構造及び文法事項」には「小

学校学習指導要領第2章第10節外国語第2の2の(1)のエ及び次に示す事項について、意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して活用すること。」とある。これが指している小学校の外国語科においては「文および文構造」と書かれており、小学校で扱う代名詞、動名詞、過去形などは個別の文法事項として説明せずにそれらを含む「文」の扱いでコミュニケーションの中で何度も聞いたり話したりすることが求められている。そして、中学校においてはその小学校での学びを引き続き、意味のある文脈の中でそれらの基本的な表現を繰り返し使うように指導が求められていることが分かる。

また、中学校学習指導要領の「3 指導計画の作成上の配慮事項」には、文法事項の指導に当たっては、次の事項に留意することと書かれている。

- (ア) 英語の特質を理解させるために、関連のある文法事項はまとめて整理するなど、効果的な指導ができるように工夫すること。
- (イ) 文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、コミュニケーションの目的を達成する上での必要性や有用性を実感させたうえでその知識を活用させたり、繰り返し使用することで当該文法事項の規則性や構造などについて気付きを促したりするなど、言語活動と効果的に関連付けて指導すること。
- (ウ) 用語や用法の区別などの指導が中心とならないよう配慮し、実際に活用できるようにするとともに、語順や修飾関係などにおける日本語との違いに留意して指導すること。

中学校でのこれまでの教科書は文法事項を軸にして編成されてきているが、こうした留意点を踏まえて小学校の既習事項を組み入れ、文法事項をコミュニケーションを支える知識として扱い、それを活用した言語活動を重視することが今回の教科書には求められていることが分かる。

3. 教科書分析

中学校英語1年生の教科書が、小学校の学びを踏まえてどのように繋いでいるかを調べるために検定教科書6社の分析を行った。特に注目したのが、以下の点である。

1. 最初の単元に入る前の橋渡し部分がどのように作られているか。

2. 小学校の既習表現の文法事項をどのような配列で並べているか。

3. 1 単元前の橋渡し部分の工夫

6社の教科書の単元前の橋渡し部分の内容と分量は表2の通りである。分量については、紙面サイズが大きい教科書もあるが目安としてページ数と教科書会社が作成した年間計画の時数を挙げた。

表2 6社の教科書の橋渡し部分の内容と分量

教科書	橋渡し部分	橋渡し部分の内容 [ページ数、目安の時間] (活動の4技能)
A	Unit 0 part1-2	あいさつ、指示で動く、好きなものを尋ね合う、部活、音と文字 [5 pages、2 時間] (4 技能)
B	Get Ready!-3 Program 0	学校の中、food、sports、国、なりきりインタビュー、自己紹介 アルファベット、つづり、発音 [14 pages、6 時間] (4 技能)
C	Starter 1-3	登場人物、文字と音、コミュニケーションを楽しもう (月、曜日、 教科、私の一日、私の町) [8 pages、3 時間] (L、S、W)
D	Springboard 1-3	登場人物の紹介、さまざまな会話、音声から文字、教室英語、 すごろく [7 pages、4 時間] (L、S、R)
E	Let's Be Friends! ①-⑦	言葉で人とつながろう、好きなものでつながろう、行きたい国 を伝え合おう、数字・動物、誕生日、アルファベット、音とつ づり、[13 pages、7 時間] (L、S、W)
F	Let's start ①-⑦	学校の会話、町の会話、ABC、文字、発音、数字、小学校の思い 出、中学校でしたいこと [14 pages、7 時間] (4 技能)

どの教科書にも橋渡し教材が入っており、小学校で学んだことの復習ができるように配慮されている。教科書によってはその教科書の登場人物の紹介もあり、これは今後の学習への情報となるが、人物紹介は小学校でよく扱われる内容なのでこの中に含めた。中学校教師は、それらを使って言語活動を行うことで小学校の定着具合をみることができ、また複数の小学校から中学校へ上がってきている場合は、小学校間の差を把握し、ある程度地ならしをすることが可能になる。内容は、『We Can!1・2』に取り上げられていた誕生日、行きたい国、好きなもの、中学校でしたいことや、3・4年生用の『Let's Try! 1・2』で扱われていた数、曜日などが見られる。どの教科書も共通して取り上げているのは文字と音についてであるが、他の内容はばらつきがあり、ページ数も5ページから14ページと幅が大きい。技能についても聞く活動と話す活動は共通し

て組まれているが、読むこと、書くことについてはばらつきがある。読む活動は、単語を音に合わせて読むとか、マッチングや指差しゲームをするのに文字の単語とその絵が一緒にあるので文字を読んで判断していることもあるし、絵のみで選ぶこともあるだろう。すごろくはサイコロの目の数を進めたところに英語が書かれているので文を読むことになる。書く活動は文字を書くだけのものから、なぞり書きを含めて単語を書いて文を完成させる活動もある。橋渡し教材を扱う時数も、教科書によってまちまちであり、2時間から7時間の幅があった。実際のところは、学校の実態や教師の考えによってこの目安の時数は変わると思われる。小学校での学びを表面的になぞるだけでは、生徒にとっては新鮮味に欠けて英語学習への意欲を下げることにもなりかねないのでこの部分は中学校英語への期待が持てるような工夫も必要になると思われる。

3.2 小学校での既習表現の文法の配置

中学生は小学校での既習の表現を聞くこと・話すことにおいてかなり身につけていても、文構造を正確に理解しているわけではない。このような生徒の実態に合わせて中学校教師はこれまでの文法指導を変えていく必要がある。その指導の基となる教科書では小学校の既習の文法事項をどのように組み入れているのだろうか。既習表現が多く扱われる1年生の1学期の単元名と扱う文法事項を表3にまとめた。

表3 中学校教科書6社の1学期の単元名と扱う文法事項

	単 元	文法事項
A	1 New School, New Friends 2 Our New Teacher 3 Club Activities 4 Friends in New Zealand 5 A Japanese Summer Festival	am, like, Are you…?, Do you…?, can is, What…?, Who…?, How…? Where…?, When…?, want, How many…? Be…, Come…, Don't…, What + 名詞…? 前置詞、動名詞、過去形
B	1 友達を作ろう 2 1-B の生徒たち 3 タレントショーを開こう 4 Let's Enjoy Japanese Culture	am, Are you…?, Where…? have, Do you…? When…? can, Can you…? What…? Is that…? Who is…? She is…
C	1 About Me 2 English Camp 3 Our New Friend	am, are, play, like, 疑問文、否定文 can, cannot, Can you…? This is…, What/Who is..? I like him/her.
D	1 Hello, New Friends 2 Talking with Friends 3 My Favorite Person 4 Our Summer Stories	am, like, My favorite ~ is… 疑問文 (are, do, can)、疑問詞 3 単現 過去形
E	1 Here We Go! 2 Club Activities 3 Enjoy the Summer	am, like, can 疑問文 (are, do, can) What, like ~ ing, want to ~
F	1 英語で話そう 2 学校で 3 海外からの転校生 4 美術館で	am, are, Are you…? This is…, What is this?, He/ She is… like, Look…, Don't look … What…?, What+ 名詞…?, 複数形, How many…?

どの教科書も最初の文法事項として be 動詞の am が出てくるが、同時に一般動詞を出している教科書 (A, B, C, D, E) と単元を分けている教科書 (F) に分かれている。be 動詞の are も早く登場するが、相手がいて友達を作るという場面では当然のことで、Are you ~? の疑問文もそして否定文も自然に出てくる。教科書によっては、be 動詞、一般動詞、can を使った肯定文だけをまず扱い、次の単元で疑問文を扱っている (D, E)。疑問詞を使った疑問文の導入も小学校でよく触れているので最初の単元から出てくる教科書 (B) と次の単元以降で扱う教科書 (A, C, D, E, F) に分かれる。さらに、be 動詞の is は早い段階で出てくるが、一般動詞の三単現 s は 1 学期に出てくる教科書は 1

社だけで、他は2学期の学習となっている。これは小学校で扱っていないので丁寧に指導する必要がある。

英語表現が小学校ですでに身につけている場合は、中学校での文法説明を聞くことで自分の口から出てくる英語の仕組みが分かり、その仕組みを使って同じ仕組みの別な英語表現が生み出せることになる。しかし、小学校での既習表現が身につけていないと英語を表現するときの手掛かりは今習ったばかりの文法知識になり、多くの情報が一度に入ってくると混乱する生徒も出てくるだろう。そのような生徒もいることを想定して、生徒のアウトプットの機会を多く作り、粘り強く英語を使う中ことで動詞の使い分けや語順、代名詞などが分かってくるようにしたい。さらに、教師は個々の生徒ヘリキャストで正しい英語を提示し、あるいは間違いの多いところはクラス全体へ指導し、生徒の英語の正確さを高めていく必要がある。つまり、文法知識が先にあって、それを練習して身につけるという手順というよりは、すでにインプットされている英語を使用しながら、英語の仕組みが見えてくるという手順を踏んでいると考えたほうが良いだろう。間違いを恐れずに、英語を使ってみることが大事なので教室の雰囲気作りや生徒の主体性を引き出すことも必要だろう。

このように小学校の既習表現の文法事項の順番などの扱いはさまざまであるが、共通しているのは、学習指導要領の留意点を順守してどの教科書も各単元末かいくつかをまとめた単元末に文法のまとめのページをおいていることだ。このページを生かして、単元内での文法説明は手身短に行い、このまとめ部分で英語の仕組みが大局的に理解・整理できると英語への興味が増すことも考えられる。文法は知識として覚えるというよりは、理解し、使って身につけるようになってほしいものである。

どの教科書も学習指導要領を反映し、小学校の学びを取り入れるよう工夫している。教科書Aは橋渡し教材が少なかったが、Unit 5までは単元中の各part初めにEnjoy Communicationという枠を作り、小学校で行った活動を入れていて、小学校での学びをしっかり思い出し、その上で読む活動や書く活動を強化している教科書の構成になっている。2学期のUnit 6からは紙面構成も

大きく変わり、中学校での新出文法事項が扱われている。また、別の教科書では2コマ漫画でその単元で取り上げたい表現を出しており、表現が使われる場面、状況がしっかり押さえられるよう工夫されている。さらに、複数の単元後にこれまでの学習内容を使って技能統合型の言語活動が組まれている。これは評価の場面でもあるが、学習指導要領の留意点の「繰り返し使用する」ということをよく反映している。

4. おわりに

小中連携について、学習指導要領の4技能の目標を対比することで、その接続部分が見えてきた。小中連携のためにはお互いの学習指導要領を把握することで、小学校教師は先の見通しを持った指導ができ、中学校教師はこれまでとは違う210時間の外国語学習経験のある生徒たちへの授業づくりに備えることができる。また、中学校教師は小学校の既習内容を引き出し、そこに文法事項などの知識を加えることでこれまでの学びを強化し、学習への意欲を高めることができるだろう。

教科書を分析する中で、どの教科書も連携を意識し、特に小学校での既習表現の扱いについての工夫が見えてきた。教師は、教科書作成の意図をよく理解してその工夫を生かすような授業を展開することで、中学校の到達目標のA1-A2レベルの達成につながるのだろうと考える。

今回は、教科書の文法事項に焦点を当てたが、小中連携において考慮すべき点は他にも4技能のバランスや語彙指導などが考えられる。今後の研究としていきたい。

注1

2019年12月に文部科学省より発表されたプロジェクト。GIGAとはGlobal and Innovation Gateway for Allの略。小学生、中学生に一人1台のPCと全国の学校に高速大容量の通信ネットワークを整備し、多様な子どもたちに最適化された創造性を育む教育を実現する構想。

使用教科書：

BLUE SKY English Course 1 啓林館
 Here We Go! ENGLISH COURSE1 光村図書
 NEW CROWN English Series 1 三省堂
 NEW HORIZON English Course 1 東京書籍
 ONE WORLD English Course 1 教育出版
 SUNSHINE ENGLISH COURSE 1 開隆堂

参考文献：

田中茂範・阿部一（2021）「確かな英語の力を育てる英語教育のエッセンシャルズ」くろしお出版
 文部科学省（2017）「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）」開隆堂
 文部科学省（2017）「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）」開隆堂
 文部科学省（2018）「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編」開隆堂
 文部科学省（2018）「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語編」開隆堂

論文要旨

How to Coordinate “Foreign Language” of Elementary Schools with English Class of Junior High Schools: Analysis of English Textbooks of Junior High Schools

Noriko Kawakami

“Foreign Language” classes officially started from last year in the elementary schools in Japan and the students learn English for 210 hours in total. The English teachers in junior high schools are required to coordinate what the students learned in elementary schools with what they will learn in junior high schools. They should teach in a way to adjusting to the new learners and are expected to boost their English abilities.

This study will first focus on the coordination between elementary school English education and junior high school English education, looking at the objectives of both Courses of Study. Secondly, the six English textbooks of junior high schools will be examined to see how they treat knowledge and skills of the students learned in elementary schools.